パ人の約半数が，到着後六か月以内に死亡している」（p. 124）という17世紀・18世紀のバタヴィアにおける風土病問題を，ニャイの知恵が必要とされた分野として採り上げ，引用されている。この書に対するアンダヤの書評［Andaya 2011］は，ジョーンズの探究の労を讃えつつ，残酷さと搾取が横溢する一貫して暗い見通しがどこまで一般の（ordinary）アジア人女性の境遇を映しているかを問うている。この問いに対しては，今後さらなる新史料の開拓によって答えられなければならないだろう。

アンダヤらに比すと，本書の著者は総じて，言わばポジティブな視点から，従来の東南アジア史が看過しがちだった媒介者たちを論じている。そうした本書の姿勢には読者の関心を呼びうる喚起力があり，新書版にふさわしい東南アジア史への恰好の入門書となっていると言えよう。

（飯島明子・東洋文庫研究員）

参考文献

弘末雅士．2004.『東南アジアの港市世界――地域社会の形成と世界秩序』東京：岩波書店.

――――（編）．2013.『越境者の世界史――奴隷・移住者・混血者』横浜：春風社.

――――．2016.「近代インドネシアにおける民族主義の展開と『混淆婚』――ニャイと欧亜混血者の陰」『女性から描く世界史―― 17～20世紀への新しいアプローチ』水井万里子；伏見岳志；太田淳；松井洋子；杉浦未樹（編），18–33ページ所収．東京：勉誠出版.

石井米雄；桜井由躬雄（編）．1999.『東南アジア史Ⅰ　大陸部』（新版世界各国史5）東京：山川出版社.

小川　博（編）．1998.『中国人の南方見聞録――瀛涯勝覧』東京：吉川弘文館.

リード，アンソニー．2021.『世界史のなかの東南アジア上・下』太田淳；長田紀之（監訳）．名古屋：名古屋大学出版会.（原著 Reid, Anthony. 2015. *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*. West Sussex: Wiley-Blackwell.）

ストーラー，アン・ローラ．2010.『肉体の知識と帝国の権力――人種と植民地支配における親密なるもの』永渕康之；水谷智；吉田信（訳）．東京：以文社.（原著 Stoler, Ann Laura. 2003. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: University of California Press.）

Andaya, Barbara Watson. 1998. From Temporary Wife to Prostitute: Sexuality and Economic Change in Early Modern Southeast Asia. *Journal of Women's History* 9(4): 11–34.

――――. 2011. Review of *Wives, Slaves, and Concubines: A History of the Female Underclass in Dutch Asia*. By Eric Jones. Dekalb, Illinois: Northern Illinois University Press, 2010. *International Journal of Asian Studies* 8(2): 233–235.

Hirosue, Masashi. 2020. The Development of Indonesian Nationalism and Controversies over the Issue of "Mixed Marriages" in the Twentieth-Century Dutch East Indies. In *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia: Role of Local Collaborators*, edited by Masashi Hirosue, pp. 211–232. Tokyo: Toyo Bunko.

Jones, Eric. 2010. *Wives, Slaves, and Concubines: A History of the Female Underclass in Dutch Asia*. DeKalb: Northern Illinois University Press.

西　直美．『イスラーム改革派と社会統合――タイ深南部におけるマレー・ナショナリズムの変容』慶應義塾大学出版会，2022，ii+276p.

ムスリムにとって，イスラームが自らの行動に正当性を与え，価値観の源泉になっていることは言を俟たない。世界中のムスリムは，この点において同一の存在である。しかしその一方で，現実世界に生きる者としての個々のムスリムは，その現実性ゆえにイスラームをもとにした各人なりの正当性や価値観を作り続けている。その結果，イスラームには，ムスリムを統合させると同時にムスリムに亀裂をもたらすという，パラドキシカルな力が存在することになる。地域研究からイス

ラームをとらえる意義と重要性は，イスラームやムスリムの実践においてこの力がどのように作用し，ムスリムの統合と分裂を引き起こしているのかを見定めることで，イスラームへの理解を深化させることにあろう。

本書もまた，地域研究的イスラーム研究のひとつに位置づけられる。著者によれば，本書の目的は「思想的な背景や運動に着目するイスラーム主義研究の成果と，人びとのイスラームをめぐる価値観を社会や国家とのつながりにおいて理解しようとする人類学者の問題意識をふまえたうえで，タイにおけるイスラーム改革派の特徴と，改革派が深南部にもたらした変化について考察すること」（p. 4）にある。イスラーム改革派が信奉する「理念」が，タイの国民統合や深南部の分離独立運動，教育の近代化，タイの政治状況などのなかで，深南部ムスリム社会でいかに実践され，それが人々にどのような影響や変化をもたらしてきたかについて検討する本書は，この目的を見事に果たしている。

まずは本書の構成と内容を概観しておこう。本書の構成は以下の通りである。

はじめに――イスラームへの回帰は何を変えたのか
第1章　タイ・ムスリムの創造
第2章　イスラーム伝統派と改革派
第3章　イスラームの管理統制とその限界
第4章　ポーノから学校へ――イスラーム改革派と教育の近代化
第5章　イスラームが生み出す社会の亀裂
第6章　イスラーム復興と政治
おわりに――イスラーム改革派と伝統派の接近？

第1章では，タイの統治と，それにたいするマレー・ムスリムの抵抗から，深南部問題が概観される。現在のタイ南部からマレーシア北部にかけて，かつてマレー系ムスリムの王国であるパタニ王国が存在したが，20世紀初頭にその一部がシャム（のちにタイと国名変更）へ，残りはイギリスの保護下へと分割された。深南部とは，このときタイの領土として確定された地域の総称である。その後，タイにおける近代国家形成の過程で，深南部においてタイに同化した「タイ・ムスリム」の創造を試みるタイ政府にたいして，マレー・イスラーム世界への帰属意識を持つムスリムの側は分離独立への動きを強めていく。その時々の政策によって，両者の融和と対立が繰り返されるのが深南部における状況である。深南部のムスリムは，「タイ・ムスリム」として生きる者やそれに違和感を覚える者，マレーの伝統にアイデンティティを有する者やより純化されたイスラームを志向する者など，さまざまに多様な姿を示している。

第2章は，近代以降の世界的なイスラーム復興の動きを背景としながら，深南部におけるイスラーム改革派について紹介している。深南部においても1970年代から80年代にかけて，イスラーム改革派の影響が顕在化する。分離独立運動のイスラーム指導者たちがマレー・イスラームという枠組みでのナショナリズムを主張することでタイ政府と敵対的であったのにたいして，イスラームの純化を求める改革派（サラフィー主義）のムスリムたちは政府と敵対的な関係にはならず，逆に，マレー・ナショナリズムやマレーの伝統に基づくイスラーム実践と対峙していたのであった。

第3章では，ファトワー（法学者によるイスラーム教義にかんする回答）やイスラーム法制度をもとに，ムスリムを位置づけようとする公的な枠組みと，伝統派，改革派それぞれにおけるイスラーム解釈の違いが紹介される。本章でとくに興味深いのは，「ジハード」をめぐる解釈の違いである。タイではムスリムの公的指導者としての役職（チュラーラーチャモントリー）が設置されているが，深南部では，各人がそれぞれ信奉する指導者のイスラームに従っている。伝統派（なかでも分離独立派）が「ジハード」をタイ政府との武装闘争をも辞さない「戦争」としてとらえているのにたいして，改革派は戦闘はあくまでも最終手段であり，まずは平和や相互理解，公正さをもとに現世と来世における「良き生」を求めることが「ジハード」の目的であると考えている。人々がどちらの見解を受け入れるのかは，「かならずしもイスラーム的な正しさではなく，当事者にとっていかに『真正だ』

と思えるかという点にもかかわっている」(p. 111)という著者の指摘は，イスラームの実践を理解するうえで重要な視点であると思う。

深南部における改革派と伝統派の対立は，イスラーム教育にも見ることができる。第4章は，イスラームを管理下に位置づけるべくタイ政府によって進められるイスラーム教育の制度化とそれに対抗する側の教育が取り上げられる。従来，深南部ではポーノと呼ばれるイスラーム私塾が教育を担っていたが，政府はポーノを学校制度のなかに組み込むことで，深南部のムスリムを「タイ・ムスリム」という新たな存在に変えていこうとしたのである。一方，イスラームとマレー文化，マレー語にアイデンティティを持つ側のムスリムにとっては，政府によるこのような管理を甘受することはできず，当地でのイスラームの言語であるマレー語での教育に固執する。政府によるイスラーム教育の制度化は人々に大学をはじめとする高度なイスラーム教育へのアクセスをもたらしたが，そのこと自体をよしとしない人々との間で大きな差が生じている。イスラームの知のありかたが，まさにムスリムの間の「対立の最前線」ともなっているのである。

第5章，第6章では，深南部住民への数多くのインタビューを織り込みながら，政治的側面からイスラーム復興が論じられる。第5章で扱われるのは，イスラーム復興の潮流がもたらしたムスリム内部での亀裂である。1980年代以降強化された深南部における改革派の影響力は，「ビドア」をめぐるムスリム社会の対立を生みだした。ビドアとはイスラーム的な正しさからの逸脱を意味するものであり，ムハンマドの時代に存在しなかった慣行やモノの使用について，それが容認されるか否かという判断においてムスリムの間に違いが出ることが多い。深南部ムスリムの間で広くおこなわれてきた慣行であるラーヨーネー（ラマダン明け1週間後を祝う祝祭）やマウリド（ムハンマド生誕祭）などにかんして，ビドアという論点は教義解釈といった神学的な対立だけではなく，現実社会における対立をももたらすことになった。

第6章では，イスラーム政党の動きと「ジハード」をめぐる解釈におけるイスラーム内部の多様性が論じられる。2000年代以降，深南部ではさまざまなイスラーム政党の活動が活発化したが，いずれもイスラームの教えに則った社会づくりを目指しており，分離独立運動とは一線を画している。従来のマレー・ナショナリズムを核としたムスリムの間では，タイ政府との戦いもジハードであると解釈されていたのにたいして，これら改革派イスラーム政党にとっては，イスラームの理念を実現できるのであれば戦闘的なジハードは必要ないという考えもあり，実際に「体制側」で働くムスリムたちの数も増加しているという。まさに「ジハードの解釈」が「タイ政府との戦いを正当化するためにも，そしてタイ政府との戦いを回避するためにももちいられている」(p. 217) のである。

終章では，タイの文脈のなかでのイスラーム改革派が総括される。イスラームへの回帰を主張する改革派は，マレー・ナショナリズムを相対化するとともに国家との対立を回避するが，伝統的な共同体にたいする距離感の違いによって社会内部での対立を引き起こしている。しかし，改革派のローカル化と伝統社会の変容とが，改革派を社会に受け入れられる存在へと変えつつある。この点に，改革派によるマレー・ムスリムの社会統合の促進が期待される。

本書を読んで，評者は二つの点に関心を持った。ひとつは，イスラーム改革派がタイ政府と親和的であり，逆に，イスラーム的な正しさを理由に伝統的イスラームを信奉する分離独立派との間に亀裂があらわれてくるという，深南部イスラームをめぐる状況である。従来，深南部問題は分離独立を志向するイスラーム主義者対タイ政府という構図で理解されることがもっぱらであった。それにたいして，本書は，世界的なイスラーム復興の潮流や近代教育制度の浸透などを背景にした改革派の深南部への広がりと人々の側の受容を丁寧に描くことで，深南部問題の実際を詳細に伝えている。

評者が関心を抱いたいま一つの点は，本書が，イスラーム研究という枠を離れて，人々のアイデンティティや帰属意識形成についての事例研究としても読めることである。深南部のムスリムは，タイ国家とかつてのパタニ王国の領域，イスラーム教義と地域の伝統，国語であるタイ語とパタニ

地方のマレー語等，たがいに相異なるベクトルのなかで生きている。深南部の人々にたいする多くのインタビューからは，帰属意識とは国家や民族や宗教といった大文字の「正義」によって一方向的に規定されるようなものではなく，一人一人の日常的経験のうえに積み重ねられていくものであるという，帰属意識形成の機序を読み取ることができる。

著者は，改革派内部の多様性の検討が残された課題であると本書を結んでいる。多様なのは，改革派だけではなく，伝統派，分離独立派とされるムスリム内部でも同様なはずである。改革派がマレー・ムスリムの社会統合を促進し，それをもとに改革派と伝統派の歩み寄りが期待できるという著者の主張をさらに説得的なものにするためには，両派それぞれの一層の多様性をふまえたうえで，ムスリム社会の変容について引き続いての検討が必要であろう。地域的にアクセスすることが困難なフィールドに果敢に挑んできた著者であるからこそ，今後の研究の展開が待ち遠しい。

（多和田裕司・大阪公立大学大学院文学研究科）

重冨真一（編著）.『地域社会と開発　第3巻　住民組織化の地域メカニズム』（日本福祉大学COEプログラム　地域社会開発叢書）古今書院，2021，xviii+265p.

本書は，農村開発・地域開発の関係者や地域社会に関心をもつ大学学部生に対して，地域社会を目の前にしたときにまず比較的簡便にその特徴を把握する方法は何かを教えるものだという。それは，「組織反応分析法」と呼ぶ手法である。すなわち，地域社会に何らかのインパクトが加わったときに，そこでどのような組織的反応が起きるのかを観察し，そこから地域社会の組織化メカニズムを見つけ出す。インパクトは，農村開発の事業でも，災害でもよい。とにかく，地域社会で暮らすひとびとが，何らかの対応に迫られている事態に注目する。そして，そのとき住民の間にどのような組織行為が生じるのかを観察することを通して，背後にある地域社会の仕組みを捉え，その特徴を考えていこうと提案する。この方法だと，比較的短時間の調査で，眼前の地域社会に内在する仕組みについておおよその当たりを付けることができる。その組織化の仕組みを，本書は，「地域社会の組織力」と呼ぶ。

以上のような関心の所在が，序論に続いて，第1章（重冨真一）で詳しく説明される。農村開発では，協同組合や購買グループなどの組織化により，農民が市場や行政，地域社会といった外部の資源にアクセスし，活用できるように働きかける。組合などの設立は，事業の受け皿となる組織を得るためにも必要である。しかし，農村開発の現場では，支援者が手を引いた後に活動が停止するケースも多い。そのような事態を避けるために，上述の「組織反応分析法」が役立つ。それは，外部からのインパクトが地域社会に生みだす組織化の特徴を，集団・制度・資源のユニークな組み合わせと理解し，地域に合った組織化の仕組みを踏まえた事業のデザインを可能にするからである。

第2章（重冨真一）は，タイ農村の住民組織の組織力と農村開発プロジェクトの関係を論じる。1980年代のタイでは，どの地方でもほぼ同様の農村開発メニューが実施され，同じような住民組織化が進められた。しかし，住民組織の形成過程には地方ごとの違いが明瞭だった。住民からみれば，行政村，自生村（集落），寺の布施者集団，親族の集団などの制度・資源が利用可能だった。東北部の農村では，行政村，自生村，寺の布施者集団が重なって開発組織を形成することが多く，そこに経験が蓄積された。しかし中部デルタの農村では，特定の地域集団に限定されない，二者関係にもとづく住民のネットワークが基盤であり，開発経験を蓄積する組織体はなかった。開発の支援者は，以上のような地域ごとの「地域社会の組織力」の違いを事業前に理解しておく必要がある。

第3章（島上宗子）が注目するのは，インドネシア政府が2007年から実施した「住民エンパワーメントのための国家プログラム」（Program Nasional Pemberdayaan Masyarakat）である。そのプログラムを外部からのインパクトと見立てて，ジャワ島とスラウェシ島の4つの村がいかに対応したのかを検討する。分析されるのは，プログラムを村落